

閉会の挨拶

北陸信越工学教育協会 会長
福井大学工学部長
福井 一俊

福井大学の工学部の福井です。皆様、4時間を超える長丁場のシンポジウムでしたが、ご苦労さまでした。

最初、「DX時代の」というタイトルを聞いて、ついにDXの時代になったかと思っていたんですが、講演1で福井大学の廣瀬先生に、福井大学を例に取って、数理・データサイエンス・AI教育をどうやってやっていくかという具体的な話をさせていただきました。講演4では、新潟大学の今村先生に、生涯教育、初等教育等で、要するに地域貢献、いかにDX時代を市井にしみわたらせるかという、結構地道ではありますが重要な話を伺ったなというふうに思っています。

一方で、金沢大学の森先生がお話しくくださったとおり、DXについての経産省の定義というのは有名で、私もこれをずっと考えてきたんですけど、デジタル技術を活用することによってビジネスモデルや人々の生活を根底から変えるということで、自分なりの解釈だと、とにかく生まれたデータをデジタル化したら最後までデジタルのまま使うという、要するにデジタルデータを殺さないで最後まで生かしていくことかなと思っています。そのときにDXと教育というのはどういう関係なのかというのを考えながら伺っていたんですが、奥井課長補佐から、文科省らしからぬ話ですがスキームDについてご説明いただき、これは教育最大化ということで、生まれたデータをどうやって最大化して使おうかということとか、アイデアをほかでどう使うかとかという話をさせていただいたということで、文科省らしからぬ話なので、この後どうなるのか楽しみであり、もう一方で注視していく必要があると思いました。

一方で、データをデジタル化していくというのがやはりDX時代では大事で、その辺りの話から入っているのが信州大学の新村先生と金沢大学の森先生でした。デジタル化して行って、新村先生はそれでデータが出たときに、どうやって使うかということのお話をいただいたのかなと思っています、森先生は、それを時系列で、まさにDX化の流れを話し

いただいたと思っていて、それを聞いていると、結局はDX化の戦略を伺ったのかなと思って聞かせていただきました。

こういう戦略というのは、我々も何か同じようなことを考えていたので、なるほどと思いつつ、時系列でお示ししていただいたので、何年遅れているかが分かってしまって危機感を抱きましたが、何年遅れているかは内緒で終わらせていただきたいと思います。

最後に、今回のご講演をいただきました先生方、それから文部科学省の奥井補佐にお礼を申し上げるとともに、この準備をしていただいた藤垣先生ほか事務系の方々の皆様に感謝を示しまして、終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。